

「二人の子どもを手元に」と願う母

公益社団法人 家庭問題情報センター 真板 彰子

清美さん（三十二歳）は、現在、別居中です。七歳と四歳の女の子がいます。子どもたちの育児に疲れを感じ、うつ状態になり、言うことを聞かない長女に手を上げたことで、子どもを置いて実家に身を寄せることになってしまいました。時と共に子どもとの同居を強く望むようになり、いてもたってもいられず相談に訪れました。

カ（カウンセラー）別居して一年が経ってしまっただけですね。その間どうしていらしたのですか。お子さんとは会う機会があったのでしょうか。

清（清美）いえ、一度も。夫は、私の長女に対する行為を虐待ととらえ、会わせてくれませんでした。

今すぐに子どもたちを私の手元にと思っています。無理ならせめて会わせてほしい、と言いつづけています。

カ この一年間、清美さんがどんな想いで過ごされたか。

でもその時は、長女にそうせざるを得なかったのでしょうか。

清 そうですね。私の思い通りにならない長女に辛く当たってしまった、ということになるのでしょうか。

今、考えると私も精神的に不安定で、私と性格の異なる長女を目の前にし、いらいらしていたと思います。ゆとりもなかったですね。

二女が生まれて二女との相性の良さを感じ

じ始めると、ますます長女の言動一つ一つに反応してしまい、夫には異常だと映ったのだと思います。

カ そのことについて話し合いをされたのでしょうか。

清 いいえ。なぜそのようなことをするのか、と夫に責められているように感じました。ますます孤独になり子どもにもぶつかったのでしょうか。

カ 離れてみて、今、お子さんにどうしてあげたいですか。

今日、相談にいらしたことは、清美さんの中で母としてこのままではいけない、と思う反面、責める自分もいて、先に進むために何か行動を起こさないと後悔すると思われたように受け止めました。

清 はい。何で虐待と言われてしまうようなことをしてしまったのか、長女に申し訳ない気持ちで一杯です。後悔しています。

自分を責めることは簡単ですが、長女の心の傷はなかなか癒えるものではないと思います。でもその過程に向き合うのも母ではないのでしょうか。逃げてはいけないうるようになりまし

自分勝手でしょうか。夫を始め、周りにはなかなか理解してもらえないと分かっています。

カ 清美さん自身落ち着いてこられたよう

で、母としての愛情をお子さんに示すことができそうですね。

具体的にはどうしたいですか。

清 夫婦関係の修復は相手もあることで難しいと思います。離婚を前提に子どもものを話し合いたいと思い、家庭裁判所に申立てをしました。

親権を私にと思っています。そして子どもとの同居を実現し、母として共に生活することを願っています。この一年が私を母として育ててくれたと思います。

力 お子さんとお会いする機会が実現したら、その一歩になるとよいですね。

(数か月後)

清 先日、裁判所の手続の中で「第三者機関の援助を受けてなら」と夫も了承してくれ面会が実現しました。

どう接してくれるか不安もありましたが、時間の空白も感じることなく、子どもたちと自然に会話することができ、ほっとしました。長女も表面上かもしれないが何のわだかまりも見せず、いろいろ話しかけてきました。二女はまだ四歳、ママが恋しく甘えるしぐさを見せていました。

約束の時間が来てしまった時は、子どもたちも私もつらい別れとなりました。本当に後悔しても遅く、心の中で謝るしかありません。

力 それはよかったですね。母子の交流を通して一つの山を越えた感じでしょうか。でも、これからの道のりは決して平坦でないことも予想されます。あつたことをどうとらえるか、お連合の見方や意向もあり、すぐ実現できるか気になります。

清美さんがどう対応するかにかかっていると 생각합니다。

今、できることは、お子さんと継続して交流する機会を持ち、心身ともに安定している、以前とは違う母として接していくことだと思います。その積み重ねが清美さんの実現したい目的に近づくことではないでしょうか。

清 すぐにでも子どもを引き取りたいと思ったのですが……。性急な行動を起こしても夫の理解が得られなければ、また子どもを巻き込んでしまいそうで、心配はしていました。

今、お聞きしたことを自分なりにあせらず考えてみます。我慢ですね。

力 清美さん以上に、お子さんたちの立場や生活環境が不安定な状況にあることを分かっていただけなら、と敢えてお話ししました。

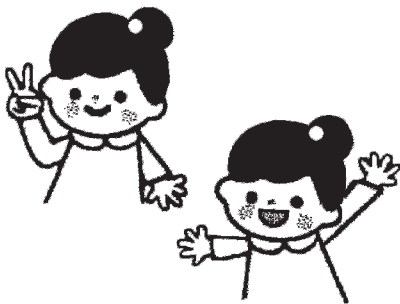
今の清美さんなら、これからでも遅くない、と自信を持って前向きに気持ちを切り替えていくことができると思います。

お子さんたちもママに愛されていることを身体で感じ、「ママと過ごしたい」ときっと思っていますよ。

清 今は、夫が一生懸命「育メン中」、と聞いています。子どもたちの父として感謝しつつ、でも母としてかわられる日が遠からず来ることを願っています。

清美さんは、そう言うのと、きりつとした表情で帰っていききました。

まずは、子どもたちの幸せを第一に考えて将来に向き合ってほしいとカウンセラーはしみじみ思いました。



家庭問題カウンセリングルーム